ヨハネによる福音書 6 章 34〜59 節

6 章も、読み進めて 今月で 59 節にまで至りますが、22 節以降 、イエスは一貫して、御自身が「まことのパン」であると語ってこられました。「天からのまことのパン」(32) であり、「神のパン」(33) であり、「命のパン」(35) であると。まことのパンであるイエス、ということが、一貫したテーマとなっています。

と同時に、今月の箇所は、一読して感じられるとおり、主の晩餐式と無縁でない内容にもなっています。とりわけ 53 節から 58 節において、御自身の肉と血とに繰り返し触れられるイエスの言葉が書き留められています。ヨハネはそこで、いったい 何を伝えようとしているのでしょうか。式との関わりも含め、御一緒に考えてみたいと思います。

「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ・・・」(53)

・今回の中心は、上述のとおり、53〜58 節と言えるでしょう。

・そして、そのクライマックスとして、次のように言われるイエスの言葉が記されています。「はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない」(53)

・イエスは、51 節までは「パン」と言い、また「肉」と言って、そのパンを食べなさい、その肉を食べなさい、と招いてこられました。

・イエスは ここに至り、「私の肉を食べ、血を飲まなければ・・・」と、より具体的に、より掘り下げて語られます。

・それは、イエス御自身のどんな場面を想い起こさせるでしょうか。

・教会のどんな場面を想像させるでしょうか。

・そして、その意味するところは？

「ユダヤ人たちは、
『どうして この人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか』と、
互いに激しく議論し始めた」(52)

参考：「弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。
『実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか』」(6：60)

・しかし、人々は初めにこう言って、言葉を返しました。「どうして この人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」(52)

・そして、今回に続く、直後の 60 節です。そこには、こう記されています。「弟子たち」までもが「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」と言った。

・ちなみに、ここでの「弟子たち」とは 12 弟子のそれではなく、いわば追っかけのような者たちを

も含んだ より広い意味での弟子たちを指しています。とはいえ、彼らまでもが、なんともひどい話だ、と言ったというのです。

・御存じのとおり、ユダヤ教の信徒は今日(こんにち)でも、血の付いた肉は食べません。血を抜いたものしか、口にしません。血が出ると、生命力が衰える。ですから、ユダヤ教では、血は命を表わし、神に属するものとされています。

・そんな彼らにとって、「血を飲まなければ」(53) などとは、タブーに触れるような、信じがたい言葉でした。

・それにしても、彼らの何が問題だったのでしょうか。イエスの言葉を疎(うと)ませた、彼らのその原因とは？

・また、ここでのやり取りから学ぶべき信仰的意味合いとは？

「わたしの肉を食べ・・・」(54、56)
「わたしを食べる者も・・・」(57)

・「私の肉を食べ、血を飲まなければ・・・」(53) と言われるイエス。しかし、それはいったい、どういうことなのでしょう。内なるメッセージに聴き耳を立てるとき、そこから何が聴こえてくるでしょうか。

・実は、54、56、57 節では、動物が餌(えさ)を食べるときのように「ガツガツ食べる」「ムシャムシャ食べる」という意味合いの言葉が用いられています。「(わたしの肉を／わたしを) 食べ (る) (τρώγων(トゥローゴーン)＜τρώγω(トゥローゴー))」という部分です。

・ということは、原文のギリシア語では そこで、イエスを食す者のどんな在り方が暗示されているでしょうか。

・また、そこから、ヨハネの教会のどんな姿が想(おも)い描(えが)かれるでしょうか。

・つまり、イエスを頂くとはどういうことで、そうする私たちはそれでどうされてゆくのか。
　そして、それはまた、見方を変えれば、この私たちがどうすること、と言えるのか。
　思いをめぐらしてみましょう。

ヒント：パレスチナで「パン」とは？

・そもそも、パレスチナでは パンは命を養うものの象徴であり、そのパンを分かつことは信頼と献身とを表わしました。

・敵とパンを分かち合えば 和解を意味し、身寄りのない者を招いて家でパンを分かてば、それは どんなことをしてでもその人を守ることを意味しました。

・だとしたら、命のパンであるこの私の肉を食べ、その血を飲みなさい、とイエスが言われたとき、それは

① 私たちに対して、御自身が何をどうされ、

② また、私たちが御自分に何をどうすることを期待されるということでしょうか。

〔参考〕「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまた いつもその人の内にいる」(56)。「わたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる」(57)

〔蛇足〕そのとき、もし注意しておくべきことがあるとしたら、それは・・・？

「ユダヤ人たちは・・・イエスのことでつぶやき始め・・・」(41)

ユダヤ人たち：「これはヨセフの息子のイエスではないか。

我々はその父も母も知っている」(42)

イエス：「つぶやき合うのはやめなさい」(43)

・とはいうものの、イエスの言われることを受け入れない人々がいるのも事実です。

・イエスの後を追ってきた群衆たちも同様で、「ユダヤ人たちは、イエスが『わたしは天から降って来たパンである』と言われたので、イエスのことでつぶやき始め・・・」(41) と記されています。

・「呟く」とは、よく知るとおり、自分の中だけで、あるいは自分たちの内輪だけでブツブツ、ゴチャゴチャ言うことです。相手ときちんと向き合って、誠心誠意、真っすぐ言葉を交わすことが真の語り合いだとすれば、呟くのはそれと反対のことではないでしょうか。

・そこにあるのは いったい、そうする者たちのどんな思いでしょうか。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている」(42) と言って呟いた その呟きの裏に、彼らのどんな内心を想像することができるでしょうか。ついさっきまで、王に祭り上げようとして (6：15)、イエスの後を追いかけてきたのに・・・。

・そんな彼らに イエスが言われたのが、「つぶやき合うのはやめなさい」(43) との言葉でした。

・それは、そうでなく どうあるように、と語るものでしょうか。今日的な事柄として考えさせられます。

どう考える？ 2つの問題

・このように、人々がそう容易にはイエスを受け入れないという現実。それはまた、福音書の編纂時にヨハネの教会が直面していた現実でもあり、実際、彼らにとって まさしくそのところが問題だったのではないか、と考えられます。すなわち、ヨハネの教会はそこで葛藤し、苦闘し、そして その答えをたずね続けたのでは、ということです。

・そのことと関連し、2つの問題が残されているように思われます。

問題 ①

「父がわたしにお与えになる人は皆・・・」(37)

「わたしに与えてくださった人を一人も・・・」(39)

「父が引き寄せてくださらなければ、だれも・・・」(44)

・一つは、こうした表現から受ける印象に関係しています。

・というのも、単純に字面だけを追うと、どうでしょうか。神が決められた人だけがイエスを信じる。

その人たちは神によってあらかじめ定められていて、すでに決まっている。そんな印象を受けられないでしょうか。

・広い意味で、予定説と呼ばれたりする考え方です。様々な理解があり、学者らの間でも明確な一致は見られず、議論が続いています。

・こうした表現をどのように理解したらよいのか、皆さんはどうお考えになられるでしょうか。

問題 ②
主の晩餐式（聖餐式）に関連して

・あと一つは、主の晩餐式（聖餐式）に関連しています。近年しばしば見られる、フルオープン（完全開放）という そのもち方をめぐってです。

・フルオープンとは、信仰の有る無しにかかわらず、また年齢の如何にかかわらず、その場にいるすべての出席者にパンと葡萄酒を分かつ仕方です。ですので、そこでは極端な場合、母親が抱いたり座らせたりしている乳幼児にも同じように それらを与える姿が見られもします。

・そして、その根拠として、多くの場合、五千人の給食の記事が用いられています。イエスは、そこにいたすべての人たちに パンと魚を分かたれたのだから。だから、主の晩餐式でも同様に、すべての出席者に・・・というようにです。

・これを、これまで読み進めてきた 6 章の全体からするとき、どう考えるか。どのように理解するのが妥当か、ということです。皆さんはどう思われるでしょうか。

〔参 考〕

・これら二つの問題について考える際、参考になるように思われる事柄を以下に記しておきます。

① エルサレムの神殿が炎上し 市が陥落した 70 年以降、国外からはもとより 国内的にも厳しくなった迫害の手が、ヨハネ福音書の編纂時にはいよいよ激しさを増していた。それゆえの、宣教における ヨハネの教会の困難、葛藤、苦闘。

② 五千人の皆が、パンと魚の恵みにあずかった。そして、それらをくれたイエスの後を追った。なのに、事がイエスへの信仰の核心に至ると、その同じ人々が戸惑い、呟き、そして馬鹿馬鹿しいと言って、イエスのもとを離れ去る。湖上の奇跡を挟んで、前後が連続し かつ断絶している、6 章の そのような対比的文脈構造。

③ ヨハネ福音書がまとめられた紀元 90 年代、主の晩餐式（聖餐式）が愛餐的な食事から分かたれ、その形式をどの程度 整え、礼典的な性格をどれくらい備えるに至ったか。それはいま一つ 定かでないものの、その過程がそれなりに進んでいたことは疑いない。

④ ヨハネの福音書が収めている幾つかの記事：イエスとサマリアの女性とのやり取り（4：1～42。ヨハネだけの記述）、異邦人たるギリシア人のイエス訪問（12：20～26）、病人（5：1～18）や盲人（9：1～41）の癒やし。

⑤ ヨハネ福音書に暗示的な、（聖）霊的働きの色彩。

以上、6 章を読み進めて 今回で 4 回目に至りましたが、その全体から何を読み取り、何を聴き取られたでしょうか。良き学びのヒントとなれば幸いです。